

I はじめに

特殊教育から特別支援教育への移行が「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）」（平成15年3月・文部科学省）において提言され、小・中学校や盲・聾・養護学校に大きな転換を図ることが求められている。

盲・聾・養護学校がこうした大きな変革を乗り越え、地域におけるセンター的な役割を担っていくためには、各盲・聾・養護学校がどのような特色ある学校をめざすのか、という明確なビジョンを持って学校運営を行うことが必要となってくる。そして、そのビジョンを具体化する過程においては、校内での研究・研修体制をどのように構築するかが重要なポイントと考えられる。

ここでは、東京都立あきる野学園養護学校、東京都立中野養護学校の2校の事例を通して、こうした大きな変革に対し学校がどのように対処しているのか、そして、その中で校内の研究・研修体制をどのように構築し、運営しているのかを見ていきたい。

II 東京都立あきる野学園養護学校の事例

1 学校の概要

東京都立あきる野学園養護学校(以下あきる野学園養護学校と表記)は、東京都あきる野市に知的障害と肢体不自由の二つの教育部門を有する学校として、平成9年度に開校した。児童生徒数は知的障害部門が110名、肢体不自由部門は74名、合計184名。教職員は159名である。

平成14年度から文部科学省研究開発学校指定を受け、教育課程研究、授業改善研究を進めている。特例による教育課程を「あきる野プラン」と呼び「あきる野チャレンジ2004」と命名された具体的な計画に基づいて研究を推進している。「教科・領域に変わる新しい学習内容のまとまり」を6区分として学習内容を整理し、さらに、一人一人の教育的ニーズに応じて必要な内容を適切な方法で扱うために「支援区分選択」を設定し、より望ましい教育課程の実践研究にあたっている。

あきる野養護学校の研究は、新設校として自校の教育力の向上と指導内容の充実を大切にしながら、地域に開かれたセンター的機能を持ち、社会資源と協働し、より高い専門性を有する特別支援学校を視野に入れ、学びあい高め合う学校づくりをめざすものである。

2 研究の在り方とテーマの設定

あきる野学園養護学校では、学校長が学校経営計画として「目指す学校像」「中期的目標と方策」「今年度の取り組み目標と具体的方策」を示している。この計画の中には、校内の研究・研修についての方向性が具体的な数値目標と共に掲げられている。この学校長としてのビジョンを具現するため、「あきる野チャレンジ2004」と命名されたさらに綿密な具体策が示されており、こうした学校としての方向性の中に、校内研究・研修の位置づけがあるため、課題と目標が明確であり、教職員全体の共通理解が図られている。しかもこの内容は広く公開され、学校運営連絡協議会（本県で言う開かれた学校づくり推進委員会）において、地域の有識者、保護者代表等で検討・評価され、積極的に地域の協働を推し進めている。この背景には学校長の強いリーダーシップと、学校における組織マネジメントの視点が息づいている。表1は同校の中期的目標と方策である。

表1 あきる野学園養護学校の中期的目標と方策

【中期的目標と方策】

- 西多摩地域における特別支援学校としての具体案を模索し、実効性のある提言をしていくとともに、知・肢併置校としての教育的効果を具体的に提言する。
- 文部科学省研究開発学校としての研究成果を発表し、次期学習指導要領改定への提言となるよう教育的効果の確認できる教育課程を継続的に実施する。
- 評価規準・評価の観点の研究を進め、評価の精度を向上させるとともに、評価については2学期制の課題を解決する方策を検討し、前期及び後期に行う。
- 個別の支援計画を作成する。立案は関係機関と協働し、本人、保護者、関係機関に示し、内容のあるものにするためのシステム化を図る。そのため、専門性のある関係機関との緊密な連携を図るため、相談支援室の機能を充実する。
- ボランティア養成講座、あきる野カレッジ、学校外活動はじめ公開講座・学校開放事業等の広報活動や学校公開、学校説明会、各懇談会ならびに全国へ向けた公開研究会等を継続実施する。

さらに、中期的目標と方策に関連して平成16年度における重点目標と方策が示されており、具体的な内容と担当する部署、数値目標までが掲げられている。表2は校内研究・研修に関する具体的な内容と数値目標である。

表2 具体的な方策と数値目標

- 仮説に基づいた授業研究の実施（年間42回以上）
- 文部科学省研究開発最終発表と公開研究会の実施
- 地域文化、社会体験・自然体験、地区発表会への参加など学習機会の拡大
- アセスメントの実施（90%以上）カンファレンス等研修会及び評価回の実施（月1回）
- 週案ならびに学習活動案の作成（90%以上）
- 教材・教具の開発推進及び学習活動案の評価会議の実施（月1回）
- 初任者研修・10年経験者研修等の研修の充実

平成16年度は文部科学省研究開発校として教育課程の改善に資する研究開発と大きくかわっており、「あきる野チャレンジ2004」と命名された全体計画に詳しく具体的に示されている。これは平成14年度から16年度の3年間の計画を示したもので、今年度はその最終年度に当たる。

以上のことから研究テーマについては、学校が提示した経営計画に示された目指す学校像、子ども像、基本方針にすでに明文化されており、学校の方針に基づいて小・中・高のそれぞれの学部で具体的なテーマが設定されている。

3 研究を推進する組織の在り方

東京都では学校運営組織の見直しを図り、平成15年度から主幹制度を導入している。「主幹」は経営層である校長・教頭と、実践層である教諭等との調整的役割を行い、自らの経験を生かして教諭等をリードしていく指導・監督層としての職責を担い、課題に対する迅速かつ確かな

対応、保護者や地域のニーズへの積極的な対応を進めていくものである。これにより校内の研究・研修体制は、主幹と研究主任が推進役となっている。

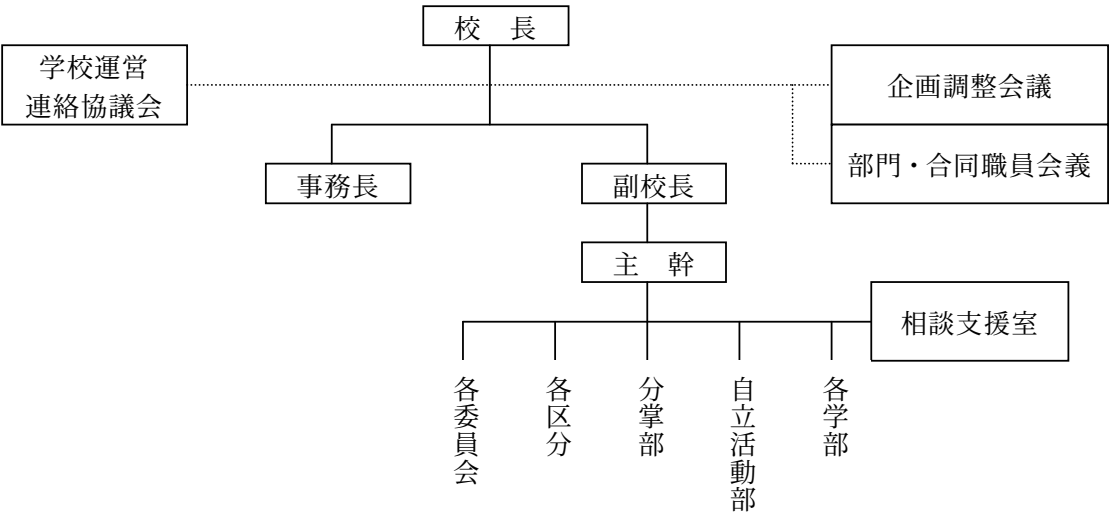


図1 分掌組織図

表3はそれぞれの職に求められる役割を東京都教育委員会の主任制度に関する検討委員会最終報告及び、文部科学省発行学校組織マネジメント研修テキストを参考にまとめたものであるが、主幹はいわゆるメンター的な存在として位置づけられており、あきる野学園養護学校では、まさに学校組織マネジメントの視点を取り入れた学校づくりを進めていることがわかる。

表3 それぞれの職に求められる役割

職 名	求められる役割
学校長	・ 中長期的なビジョンの具体的な提示 ・ 特色ある学校づくりの方向性の提示 ・ 教育成果をあげるための担任・校務等の組織づくり
副校長	・ 学校ビジョンについての教職員の考えの収集とまとめ ・ 学校の方針についての論議と意見具申 ・ 外部団体との連絡調整
主 幹	・ 学校運営に対する意見の具申や相談などによる学校運営の充実 ・ 学部間、学年間や校務分掌間の調整 ・ 主任（教諭）等への適切な指導・助言と校内研修の実施 ・ 管理層と実践層の情報交流の促進
研 究 主 任	・ 年度の計画及び中長期的な研修体制の具体的なビジョンの構築 ・ 従来の考えにとらわれない研究の発想と企画 ・ 研究に関する情報の収集と発信 ・ 研究に関する評価と課題の設定

校内の研究・研修を推進する研究部の組織は、学校長発令主任を含め15名のスタッフ（肢体不自由部門6名、知的障害部門7名、全校担当1名、研究主任1名）で構成されている。主

幹・研究主任を軸とした OJT の理念を基本とし、業務は一人一役分担を原則としている。

4 外部協力者、教育サポーター等の協力体制

(1) 学校運営連絡協議会

学校の教育活動が保護者・地域住民に理解され、かつ、学校運営に保護者・地域社会の方々との意向が反映され、地域に根ざし、より発展していくための学校支援組織とすることを目的として設置されたこの協議会は、本県の「開かれた学校づくり推進委員会」と同様の趣旨である。表 4 は平成 15 年度に委嘱された委員である。12 名のうち 5 名が評価委員を兼ねており、学校教育への提言と共に学校評価を実施している。

表 4 平成 15 年度学校運営連絡協議会委員

1	東京学芸大学 教授	評価委員
2	社会福祉法人鶴風会総括施設長	評価委員
3	横河電機株式会社 人材労政部横河ファウンドリー株式会社取締役	評価委員
4	富士通株式会社あきる野テクノロジーセンター総務部担当	評価委員
5	東京障害者職業センター多摩支所長	
6	あきる野市福祉部障害者福祉課長	
7	福生市社会福祉協議会施設事業課長	
8	青梅市自立センター総括施設長	
9	知的障害者更生施設 金木星の郷 施設長	
10	多摩川保健所保健サービス課精神保健難病対策係長	
11	あきる野市立西中学校長	
12	東京都立あきる野学園 P T A 会長	評価委員

(2) 専門家による指導への参画

平成 16 年 4 月に隣接地に「西多摩療育支援センター」が開設されたことで、特に次の点で連携を深めている。

- ・個別の指導計画の作成時に専門スタッフ（医師、PT[理学療法士]、OT[作業療法士]、ST[言語聴覚士]等）からの助言
- ・日常的に専門スタッフ（医師、PT、OT、ST 等）からの助言、指導

(3) 相談支援室－養育懇談会－の取組

相談支援室は平成 15 年度に学校内外における教育相談の充実と、今後の特別支援教育へ向けた地域のセンター的機能の充実を目指して設置された。教育相談はもちろん、他の業務として養育懇談会の実施がある。当面する課題について専門の講師を招いて行う、いわば地域に開かれた学習会の実施である。表 5 は開催した養育懇談会の内容であるが、平成 15 年度は 6 回開催し、出席者は通算 300 名を越えている。

表 5 平成 15 年度に開催した養育懇談会の内容

回	内 容	講 師
1	子育ての悩み	あきるの学園保護者
2	幼児の発達と援助について	東京小児療育病院統括施設長 医師
3	子どもの学習と教材教具の工夫	障害児基礎教育研究所長
4	障害と子どもの性教育について	東京都心身障害支援センター主任
5	障害のある子の言語の指導	のぞみ牧場学園施設長
6	自閉症の理解と適切な指導について	国立秩父学園園長

(4) 外部協力者や専門機関と連携した研究の在り方

あきる野学園養護学校では、医師、看護師、PT（理学療法士）、OT（作業療法士）、ST（言語聴覚士）、教育・心理研究者、社会人講師等、多様な職種の外部専門家との連携により、多様な教育的ニーズに応じるための専門性の向上はもちろんのこと、教育的効果の評価をはじめ、地域に研修機会を提供するセンター的機能の充実など、支援機能を有する新しい学校体制創りに努めている。

目指す学校像、子ども像を具現化する学校経営計画に示されたビジョンと方策、また、新しい教育課程作りの取組など、構築された理論が実践面でいかに反映され、児童生徒にどのような力として顕在化していくかが問われなければならないが、その実証は当然授業という指導の場面で行われ、評価されなくてはならない。こうしたコンセプトのもと、あきる野学園養護学校では年間40回(平成15年度は56回)を超える研究授業を平成12年度から毎年実施し検証を行ってきている。しかも、授業内容に関連する関係機関や専門家など、外部助言者を招いての公開の研究授業である。表6は関係する外部助言者の所属を一覧に示したものであるが、専門的教育機関はもちろんのこと、医療、さらには高等部段階での職業教育に関わる労働の分野まで、幅広いネットワークが構築されていることがわかる。

学校における授業評価は児童生徒、同僚の教員、保護者によるものが一般的であるが、こうした外部の専門家による授業評価・授業研究の取組が行われている。

表6 研究授業に招いた主な外部助言者の所属

No	助言者の所属先	区 分
1	東京学芸大学	教 育
2	ひのはら保育園	福 祉
3	のぞみ牧場学園	福 祉
4	のぞみ発達クリニック	医 療
5	茨城大学	教 育
6	西東京市就学相談員	福 祉
7	國學院大學	教 育
8	淑徳大学	教 育
9	目白大学	教 育
10	(株)アクティブ企画	労 働
11	横河ファウンドリー(株)	労 働
12	オレンジジャムコ(株)	労 働

5 知的障害部門高等部の研究の取組

(1) 研究テーマと内容について

開校から平成16年度まで取り組んだ研究テーマとその概要を表7に示す。平成10年度から東京学芸大学などと連携を始め、平成12年度からは加えて企業など労働関係と連携し研究を進めている。

表7 研究テーマと概要

年度	テーマ	概 要
平成 9 年度	個別指導計画	個別指導計画の書式の検討を行い、生徒の捉え方を多角的に分析するために、「個別指導計画表」を作成した。
平成 10 年度	一人一人の生徒が主体的に進路選択をする指導の在り方	教科「職業」における個に応じた指導の工夫を視点に研究授業を実施。生徒が仕事内容の種類に関心を持ち仕事を選択できる指導法を検討。
平成 11 年度	個別指導計画を活用した作業学習の指導の充実	作業学習陶芸班を対象に授業研究を実施。「工程分析と補助具の開発」に取り組み、意欲の喚起につなげた。
平成 12 年度	生徒一人一人が意欲的に取り組む作業学習	企業関係者を招き助言を得た。作業意欲を高めるためには適切な題材設定と工程分析が重要であることを確認した。
平成 13 年度	生徒一人一人が主体的に取り組む作業学習ー学習内容の单元化と学習環境の整備ー	全作業班が研究対象。適切な題材、工程分析、補助具の導入を基とし、適切な単元設定、学習環境の整備を図り主体性を高めた。
平成 14 年度	生徒一人一人が主体的に取り組む作業学習	単元計画や題材、工程を含めた「学習環境の整備」が本人の主体に繋がることを参観者に問い協議した。
平成 15 年度	生徒一人一人が主体的に自己選択・決定できる進路学習	研究対象を進路の授業に移し、授業改善を図った。アセスメントによるグループ編成や短期就業体験を含めた単元の見直し等が試みられた。
平成 16 年度	授業から移行支援計画へ	助言を基に改善を重ねた授業を公開し、全国の先生方や大学教授、企業関係者等から更なる助言を得る。

テーマについては、学校の基本方針に基づいて設定され、「作業学習の充実」「進路学習の充実」「移行支援計画の策定」の 3 つの柱を掲げている。作業学習の充実は工程分析と補助具の作成にあるように、一人一人ができる状況を作るなど環境を整備することで、主体的に取り組む意欲を育てることになること、進路学習ではインターンシップ、現場実習などの経験を進路選択の情報とすること、移行支援計画は在学中から移行支援の視点を持って学習や支援を進めていくことが重要なことを成果として報告している。

(2) 研究推進について

表 8 は平成 12 年度からの研究協力者の所属一覧である。作業学習、進路学習といった職業教育が主なテーマであるため、大学をはじめ、企業、職業センターなどの労働関係と連携した研究が進められている。一連の研究の柱は授業研究であり、年間 40 回を越える研究授業を実施し、外部の専門家からの助言を課題解決の糧としている。こうした外部による評価は、授業改善はもちろんのこと、生徒の側にとっては、卒業後のよりよい社会自立に向けて、質の高い知識・技能の獲得に結びつき、また、企業側にとっては障害を理解する機会となり、また、そのことは雇用の拡大につながっている。

表 8 研究授業助言者所属職名一覧

	所属 職名
1	目白大学 教授
2	秋田大学 教授
3	日本障害児教育研究所長
4	株式会社オレンジジャムコ 代表取締役社長
5	スリーエムフェニックス株式会社 取締役総務部長
6	横河ファウンドリー株式会社 取締役
7	横河ヒューマン・クリエイト株式会社 人材派遣事業部
8	横河電機株式会社サービス事業部 トレーニングセンター長
9	横河電機株式会社 人材労生部
10	横河電機株式会社サービス事業部 トレーニングセンター
11	株式会社アクティブ企画 代表取締役
12	東京都障害者職業センター多摩支所長
13	東京都障害者職業センター多摩支所
14	東京都障害者職業センター多摩支所 障害者職業カウンセラー
15	国立職業リハビリテーションセンター 職業指導部職業指導課職業カウンセラー
16	練馬区障害者就労促進協会

(3) 助言に基づく授業改善について

研究授業及び研究協議については公開とし、また、研究協議における助言の内容については表9に示すとおり、各授業別に整理されている。さらに、指摘のあった内容について改善を行ったかどうかを自己評価する欄を設け、貴重なアドバイスを確実に授業改善につなげるよう努めている。

なお、これまでの助言内容についてはあきる野学園養護学校ホームページで公開されている。

表 9 研究授業における助言内容

対象	年 度	助言 月	助言内容	○改善した △一部改善 ×未改善
作業学習 木工班	平成 12 年度	1 月	穴あけ治具は同じポジションであけられるように工夫を。	○
作業学習 木工班	平成 12 年度	1 月	治具を使うのは品質向上、効率を上げるために必要だが、簡単なことで使うと考える力が落ちてしまう、ケースパイケースで使っていく。	○
作業学習 木工班	平成 12 年度	1 月	マスクや保護具を身につける習慣をつける。	○
作業学習 木工班	平成 13 年度	12 月	教員も作業をして安全面を意識することが大切。	○
作業学習 木工班	平成 13 年度	12 月	危険なものの箱には赤いテープをする等目に見える工夫を。	○

作業学習 木工班	平成 13 年度	12 月	反省会では一人ずつほめる。ほめることが意欲を喚起させる。	○
作業学習 木工班	平成 14 年度	10 月	通路を黄色のテープ等で明確にし、材料や工具が飛び出していないように。	○
作業学習 木工班	平成 14 年度	10 月	壁に立てかけている板や棚の上に乗っているものは、ひもや鎖で倒れないようにすること。	○
作業学習 木工班	平成 14 年度	10 月	背板はシナベニアを使用したほうが仕上がりがきれいである。	○
作業学習 木工班	平成 14 年度	2 月	その日の分担や工程、目標数がわかりやすくなっているとよい。	○
作業学習 木工班	平成 14 年度	2 月	一般就労に向けた力をつけるのが目的、安全に対しての心構えと共にぜひ生産量を目指す力もつけさせてほしい。	○

※ 東京都立あきる野学園養護学校知的障害教育部門高等部公開研究会資料から一部抜粋

(4) 研究の成果と評価

こうして年度ごとの研究の成果は、研究紀要等にまとめられている。さらに公開研究会として成果発表が行われる場合もある。また、前述のとおり学校運営協議会において毎年度報告され評価を受ける。表 10 は評価結果のうち研究・研修に関するものの一部を抜粋したものである。評価は A B C の 3 段階で実施され、次年度に向けて委員からの提言も併せて行われる。以上のように、学校で行われる活動は、年度当初の目標に照らして PDCA サイクルに基づく学校評価が行われるシステムが構築され、まさに地域、関係機関、保護者との協働で学校が運営されていることがわかる。

表 10 学校運営協議会の評価

(A:目標値の 90%以上 B:70%以上 C:70%以下)

項目	目標内容等	年度当初目標値	評価
①教育課程の研究開発	特別支援教育の在り方についての研修	年 4 回以上	A
	仮説に基づいた授業研究	年 42 回以上	A
	文部科学省研究開発中間発表公開研究会	平成 16 年 2 月 10 日	A
文部科学省研究開発学校として、研究、研修を実施できた。研究授業においては 56 回開催することができた。中間発表会においては 350 名の参加があった。			
④個別の移行支援計画の作成	関係機関との支援計画の立案	50%以上	B
	保護者の参加率	50%以上	B
	個別の就業支援計画に関する公開研究会	平成 16 年 2 月 19 日	A
高等部段階で、個別移行支援計画を作成し進路指導に活用ができた。小学部、中学部についての取り組みが課題となった。			
⑥学習活動計画の作成	毎時の学習活動案の作成(略案を含む)	90%以上	A
	学習活動案の評価	90%以上	B
指導週案においては 100%実施。学習活動案の評価において、研究授業年間 56 回、初任者の授業研究においては完全実施ができた。			

※ 東京都立あきる野学園平成 16 年度学校要覧から一部抜粋

Ⅲ 東京都立中野養護学校の事例

1 学校の概要

東京都立中野養護学校は昭和 53 年に知的障害養護学校として開校し、30 校ある都内の知的障害養護学校の中のひとつである。中野区、新宿区、渋谷区、杉並区（高等部のみ）を学区とし、児童生徒数 231 名（小学部 47 名、中学部 34 名、



高等部 150 名)、46 学級、教職員数 114 名と、都内でも有数の大規模校である。

学校の特色としては、自閉症児の比率が高いこと（小学部 66%、中学部 60%、高等部 30%）、高等部の在籍者が多いこと（70%）などがある。また、保護者の教育参画意識が高く、特色ある P T A 活動が活発に展開されている。

同校は、開校当初から地域に開かれた学校として、地域住民にさまざまな学習の場を提供してきた。また、そ

の知的障害に関する専門性を生かし、学区内の障害児学級との連携を深めてきたことも大きな特色である。

中野養護学校が特別支援教育のセンター的な役割を担うセンター化事業を起こした背景には、国や東京都の動向もあったが、同校が創立以来、地域に開かれた学校を課題として持続的に学校改革に取り組んできた成果であり、同時に「地域に生きる子どもたち」をスローガンにしてきた保護者たちの熱い願いがあったようである。

2 研究の在り方と学校組織

(1) 学校づくりと校内研究

校内研究を推進する場合、年度当初に学部や研究グループごとに研究のテーマを設定することから始まるのが、多くの学校において見られる一般的なスタイルであろう。しかし中野養護学校の場合は、研究・研修の出発点が学校づくりのビジョンや「学校経営計画」と強く結びついていることが大きな特徴である。すなわち、校内での研究や研修はすべて、自校がめざす学校像と同じベクトル上にあり、それらを実現するための「学校経営計画」に明確に組み込まれている、ということである。

このような理由から、中野養護学校における校内研究体制の具体について述べる前に、同校がどのような学校づくりをめざしているのかについて次にふれておきたい。

(2) めざす学校づくり

中野養護学校が自閉症教育について取組を始めたのは平成 13 年の 2 学期からである。自閉症教育に焦点を合わせたのは次の二つの学校経営上の課題からであった。

- ア 在籍児童生徒の実態として自閉症の比率が年々増加傾向にあり、小中学部においては半数を超えたこと。（平成 15 年／小学部 70%、中学部 60%、高等部 30%）
- イ 全校を見渡したとき年齢によらず、指導が困難として取り上げられるケースの多くが自閉症の児童生徒であったこと。また、企業等で就労している卒業生の中でアフターケアを必要とするケースの中に軽度の自閉症者が多かったこと。

このような学校課題に対処するため、二つのプロジェクトとして、①自閉症教育を考える会 ② I T 化推進委員会を校内に立ち上げ、学校改革に着手した。

そして、平成 15 年度からは特別支援教育のセンター的機能を果たす学校への転換をめざして学校づくりに取り組んでいる。

3 学校経営計画に位置付けられた研究・研修

以上のような学校課題に基づき、同校では次のように平成 16 年度学校経営計画を掲げている。詳細については同校のホームページを参照していただきたいが、「重点目標と方策」に見られるように経営計画がたいへん具体的であり、数値目標も盛り込まれている。校内における研究や研修もこの中に明確に位置付けられており、学校づくりの際の重要な要素であることがわかる。

表1 平成 16 年度学校経営計画より（抜粋）

重点目標と方策
(1) 日常授業の充実（児童・生徒が見通しをもてる学習環境と給食の提供） - 平常授業の確保（始業式～修了式まで平常授業） - 学校行事（運動会、学習発表会等）開催時の授業影響（特別時程）を最小化 (2) 大学（外部専門家）連携プロジェクト：全校教職員等の専門性向上・確保 ◎大学研究室（7 大学）及び外部専門家との研究・研修連携 ○上智、明治学院、早稲田、白百合女子、学芸、広島国際、専修大学 ○児童精神科医師、臨床心理士等の専門家 ア、連携専門家による校内専門研修会（自閉症教育等）：年 10 回開催 イ、連携専門家による学部・学年共同研究会：月 1 回程度、随時開催 - 全校共通研究テーマ「コミュニケーション」（研究開発部担当） ウ、一般研修（マナー、行政課題、その他）：学期に 1～2 回開催 エ、特別支援コーディネーターのための専門研修会：年 4 回開催 ◎全国対象の研究発表会・学校公開（1/27, 282 日間）開催（案） - テーマ「専門家連携による学校作り（自閉症教育等の充実）案」 (3) 特別支援教育プロジェクト（センター的機能：研究・研修・相談・講座等） ○学区域内小中学校等教職員・関係機関職員等を対象とした研修会 - 夏奉研修会：8/2～12（講師：連携専門家等 8 講座）、その他随時開催 ○学校公開（地域住民対象）年 1 回開催（1 月） (4) 教育課題プロジェクト（障害特性に応じた教育の推進検討会：月 1 回開催） - A（高等部コース制）、B（中学部：障害対応学級）、C（小学部：障害対応学級） (5) 就労支援プロジェクト（高等部主幹・主任・進路指導部等：月 1 回開催） - 企業見学会（企業人事担当者招請：職安・支援センター連携）年 2 回開催 - 資格取得（ホームヘルパー 3 級養成講座開催）年 1 回：9/5～12/19 - NPO 連携（応用学習の場）：マナー講座（美@cc a お仕事道場）等の開催 - 卒業生支援：巡回指導（年 2 回）、本人講座（1 講座）、同窓会活動（年 3 回） (7) 保護者・地域支援プロジェクト - 保護者研修会開催（学校主催年 3 回：PTA 主催年数回） - 夏祭り（7/24）、保護者参画活動（サタデークラブ等 10 回）、その他 - ボランティア初級養成・指導者養成講座（一般対象）各 1 講座

中野養護学校における研究・研修のとりえ方は図 1 のように表すことができる。

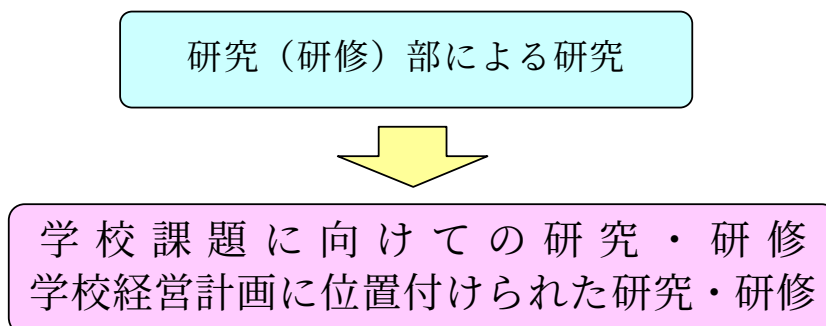


図 1

4 校務分掌における研究の位置付け

中野養護学校が地域のセンター的な役割を果たすための取組は、同校の学校組織の改善と研究の位置付けの在り方にも反映されている。

表2 平成16年度校務分掌組織

部 門	分 掌 名
教育指導 校内活動	教務、生活・保健、学校行事、予算施設
地域対策を指向して	教育相談、進路指導、渉外、 研究開発 、情報

このように校務分掌の内容を「校内活動」と「地域支援活動」の二部門に分けて整理、統合し、業務効率の向上を図っており、また、分掌業務を一人一役とし、責任を明確にしている。さらに、新しい学校課題を展開する分掌以外は最少人数で構成することとし、限られた人的資源を有効に活用する改善が図られている。

研究・研修に関わる分掌は「地域支援活動」部門の中に位置付けられ、名称も支援内容の充実を図るための高度な専門的指導内容・技術を創出する、という観点から「研究開発部」としている。具体的な活動内容は次のようになっている

表3 研究開発部の活動内容

研究開発部	全校研修の企画・推進、全校研究（専門性向上推進事業、自閉症教育）の企画・推進（学部研究との連動）、研究・研修の情報・調査（都特研含む）
-------	---

5 研究の経緯

次に、中野養護学校がどのように研究・研修を推進してきたのか見てみたい。ここでは、平成14～15年度に文部科学省の盲・聾・養護学校専門性向上推進モデル事業を受け「今後の自閉症教育の在り方」を研究課題として取り組んだ内容について見てみる。

このときの研究のねらいは以下のような内容であった。

表4 モデル事業における研究のねらい

- | |
|--|
| ○自閉症教育に視点を当てながら専門性や学校組織を見直し、新たな学校づくりを行う
(1) 専門家や研究期間（大学）と連携し、高度な専門性（障害への対応）を有する学校
(2) 支援体制（地域・保護者等）の組織を有する学校 |
|--|

平成14年度、モデル事業を受けた年には校内組織として正式に「自閉症教育研究会」を研究プロジェクトとして立ち上げ、本格的に研究が始まった。

自閉症に対しての全教職員の専門性向上を目指して、自閉症に関して著名な講師を招いて13回の全校研修会が開催された。その結果、自閉症への教育は、ダウン症に対するような知的障害教育とは、環境設定や指導内容・方法等において明らかに異なる部分が多いという全校的な共通認識を持つことができ、障害の特性に応じた指導が展開できるようになったことなどが成果としてあげられている。

平成15年度には研修成果をもとに、自閉症の仮学級編成を小・中学部において実施し、実践的な研究に進んだ。同校における研究、研修及び組織改革の経緯については次のとおりである。

表5 平成14年度・15年度の研究の概要

	ね ら い	平成14年度	平成15年度
研 究	・外部の専門家の活用を図ることにより、新たな教育内容・指導方法を見出し、障害に対応した教育活動を展開する。 ・専門家導入について具体的な内容を明確にする。～職種、活用内容、方法 ・障害特性に応じた学級や教育課程編成の在り方について専門家と共同研究し、実践する。	<専門家の活用> ・アセスメント、個別指導計画・就労支援・移行計画の検討、保護者とのミーティング ・学識経験者との連携による事例研究 明星大学;梅永雄二助教授, 小学部年生 1事例(中度) ・臨床心理士との共同研究 石原絵理氏(小・中学部;重度) 水野秀美氏(高等部 3事例;軽度、企業就労対象者) ・言語聴覚士によるアセスメント及び指導助言 越一恵氏(5回、小学部) <公開研究授業> ・対象児童についてアンケート形式で検討 小学部1年1事例;個別学習 中学部1年1組4事例;課題別学習 <学級設置の決定> 保護者への説明、学級編制の検討 <校内表示の統一> 児童の目の位置に合わせた写真表示、ひらがな・漢字表記	<専門家の活用> ・研究へのスーパーバイザー 伊藤英夫教授;全学部、通年指導法、教育課程編成、Q&A作成等の研究全般の助言 ・医療についてのケース相談 中根晃医師;全学部、月1回 ・学識経験者との連携による指導法の研究 上智大学心理学教室 山本崇博助手(週1回、小学部) ・臨床心理士との共同研究 水野秀美氏(週1回;高等部) 石原絵理氏(7回;小・中学部) ・言語聴覚士によるアセスメント 平野千枝氏(5回;小学部) <Q&A作成> 教員全員で分担し、作成 <自閉症仮学級> ・小学部1～4年、中学部1～2年各1学級、計6学級設置 ・指導方法及び教育課程の検討 <平成16年度自閉症学級正式発足>小学部1～5年、中学部1～3年各1学級、計8学級設置 学級及び教育課程編成 保護者への説明
研 修	・学校として専門性の課題を明確にし、全校教職員対象の研修会を開くことで、学校の専門性(障害特性の理解と指導の在り方)向上を図る。 ・保護者や地域の関係諸機関にも支援体制への参加を呼びかけ、子どもを取り巻く関係者全体の専門性向上に寄与する。	<講演会> 自閉症教育の基礎・基本を学ぶ。 12名の講師、年13回 <テーマ> ・障害特性の理解と指導の実践 ・アセスメントの意義 ・ヨーロッパの動向・職業教育 ・コミュニケーション指導 ・TEACCHプログラム ・人権とケア・保護者の意見 ・医療現場・国の動向 ・問題行動	<講演会> 学校センター化事業「LD・ADHD・高機能自閉症」の研修会を行い、自閉症スペクトラムについて学ぶ。 11名の講師、年11回の講演会 <テーマ> ・国の動向・諸外国の事情 ・就労支援・教育相談事例 ・医療との連携・障害の理解 ・代替コミュニケーション手段 ・都の動向
組 織	・専門性向上、支援体制整備のための学校作り(障害への対応を充実させるための学級編制、教育課程、分掌組織等の在り方の検討) ・従来の学校組織の踏襲ではなく、新しい学校課題に対応できる新たな組織の構築を図る。機能的、効果的な学校経営を行う。	<自閉症教育研究会>10名 全校研修会を担当する。 研修後のアンケート回収・分析 ・記録、事例研究、公開授業、専門家との連絡、校内統一表示の作成 <学校改善委員会>15名 プロジェクトチームは、企画調整会議メンバーを中心に構成する。 地域支援及び専門性向上を図る上での組織上の課題を整理し、検討を行う。	<研究・開発部>校務分掌11名 ・自閉症に特化した指導内容・方法の研究の推進、 ・学部研究会の推進 ・専門家との連携を担当 ・Q&A作成の推進 ・全校研修会の担当 <センター化事業担当者会> ・区教育委員会との連携 ・相談業務の担当 ・講師の依頼、派遣 ・LD,ADHD等講演会の推進 <各学部プロジェクト> 小学部・中学部 自閉症学級の教育課程編成 高等部 コース制教育課程編成

6 外部の専門家による支援体制の構築

中野養護学校における研究・研修は、学校経営方針や目指す学校像と密接に関連し、自校の学校課題を解決するための研究であり研修であることが大きな特徴である。もう一つの大きな特徴としてあげられるのは、外部の専門家との連携である。同校においては、研究活動スーパーバイザーに関しては学識経験者、医療相談に関しては医師、アセスメントに関しては臨床心理士・言語聴覚士、指導法に関しては大学、といった専門家及び関係機関との連携のシステムを構築することで、より適切な指導・助言を日常的に得ることができるようになった。どのような経緯を経て外部の専門家による支援体制を構築するに至ったのかについて見てみたい。

(1) プロジェクトの立ち上げ

平成 13 年、中野養護学校の教育内容の改善と業務効率の向上のために二つのプロジェクト

①自閉症教育を考える会 ② I T 化推進委員会を校内に立ち上げる。

(2) 自閉症教育に焦点

先に述べた中野養護学校の実態と学校の課題に基づき、自閉症教育研究会を発足させる。文部科学省の専門性モデル事業を受け、自閉症に関する研究に着手。学校教員だけではなく、保護者や地域の障害児学級の担任、施設職員にも参加を呼びかけて、年間 13 回の全校研修会を実施。

(3) 専門家との連携

平成 14 年度から全校研修と平行して専門家との連携を試行的に実施。障害特性に応じた適切な指導を行うためには、まずはその障害について認識を深めることが必要となる。そのため同校では大学教授、臨床心理士など外部の専門家を講師として招き、2 年間で 21 回の教職員向け自閉症研修会を開催し、自閉症についての知識を徹底的に身につけた。

まずは臨床心理士との連携を行った。対象児童生徒に対して臨床心理士がアセスメントをとり、そのデータをもとに管理職・教員、専門家、保護者の三者によるミーティングを行い、個別の教育支援計画への反映を図った。教員側にとっては、今まで経験や体験に基づき主観的にとらえていた児童生徒の発達課題が客観的なデータとして裏打ちされたこと、その結果、指導計画に対する自信や計画の方向性が明確になることなどにつながったようである。

さらに平成 15 年度からは大学教授とも連携し、教育全体、学校教育全体に対する指導・助言も取り入れた。

同校は、これからの特別支援教育という時代における特別支援学校（仮称）において、高度な専門性を学校全体として維持し続けるためには、アドバイザーとして外部の専門家による支援体制を構築することが不可欠であるという視点を持っているようである。

表 6 は同校における平成 16 年度の夏季休業中の研修一覧である。この一覧から同校における研修の様子、地域の小中学校を視野に入れたセンター的役割、外部の専門家との連携、保護者・P T A との連携など活発な取り組みが読み取れる。

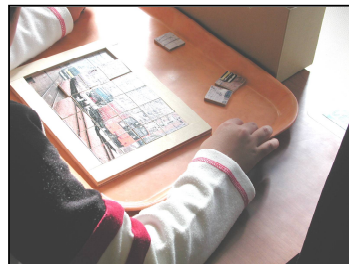


表6

H16年度 東京都立中野養護学校 夏季休業中・研修 一覧表

		午前	午後	本校教職員対象研修
出勤日	7月21日 水	小中プール(午前)、開放プール(午後)	発達臨床センターにおける相談事例から: 白百合女子大学 教授 (pm2-3:30)	
	7月22日 木	小中プール(午前)、開放プール(午後)	自閉症教育 東京学芸大学助教授(pm2-3:30)	
	7月23日 金	小中プール(午前)、開放プール(午後)		
	7月24日 土	夏 祭 り		
	7月25日 日			
	7月26日 月	小中プール(午前)、開放プール(午後)	教授:基礎技能教員チームアドバイス(pm3-5)	
	7月27日 火	小中プール(午前)、開放プール(午後)		
	7月28日 水			
	7月29日 木	勤務研修会(あなたは大丈夫? 事故事例を通して)人事部職員課・副参事(am10~12)	教授: 小学部教員チームアドバイス(Pm3:10~17:10)	
	7月30日 金	うめだあけぼの学園見学(小中学部教員参加)		心障学級担任対象
	7月31日 土			
	8月1日 日			
	8月2日 月	自閉症教育Ⅰ(am10~12)	アドバイザー研修(教材・木工・陶芸・情報等)	
	8月3日 火	自閉症教育Ⅱ(am10~12)	アドバイザー研修(教材・木工・陶芸・情報等)	
	8月4日 水	性教育(am10~12)	アドバイザー研修(教材・木工・陶芸・情報等)	
	8月5日 木	進路指導(am10~12)	アドバイザー研修(教材・木工・陶芸・情報等)	一般学級担任対象
	8月6日 金		アドバイザー研修(教材・木工・陶芸・情報等)	
	8月7日 土			
	8月8日 日			
岡田美佳展 (8/4~8/20)	8月9日 月	○地域支援事業(am10~12) 臨床心理士・スクールカウンセラーから見た特別支援の子どもたち: 臨床心理士	○地域支援事業(pm1.30~3.30) 「小中学校におけるLD、ADHD、高機能自閉症の児童生徒への教育支援体制整備のためのガイドライン(試案)」の読み方、活用方法、演習: 明治学院大学 教授	
	8月10日 火	「SST(ソーシャルスキルトレーニング)の実際と課題」 東京学芸大学 助教授	「わかる授業をどう作るか、指導の工夫と工夫」 広島国際大学 教授	
	8月11日 水	「相談・治療・臨床から見えるもの」 都立梅ヶ丘病院副院長 医師	「特別支援対象児童・生徒への教育的支援」 東京学芸大学 教授	
	8月12日 木	幼児発達健診から見える就学時の問題および保護者の課題と支援: 早稲田大学 教授	「我が子の育ち、見方、教育への提言」 保護者(LD、ADHD親の会代表等)	
	8月13日 金	先生のためのビジネスマナー講座: 主催:NPO法人 美@nca(有料)	共催事業(子ども学会・梅ヶ丘病院)	一般学級担任対象
	8月14日 土			
	8月15日 日			
	8月16日 月	○関東子ども精神保健学会教育セミナー ①午前 9:45~10:45【医療情報をどう捉え、どう発信するか(1)LD、ADHD】関東子ども精神保健学会・会長(医師) ②午前11:00~12:00【幼児虐待、学校での対応について】東京都立梅ヶ丘病院・医師	③午後13:30~15:00 【精神薬理学からみた児童精神科の薬物療法】東京都立梅ヶ丘病院・院長	ア セ ス メ ン ト 講 習 会 (理 有 士 料)
	8月17日 火	④午前 9:30~10:15【医療情報をどう捉え、どう発信するか(2)高機能自閉症とアスペルガー障害など】関東子ども精神保健学会・会長(医師) ⑤午前10:30~12:00【児童思春期の統合失調症】東京都立梅ヶ丘病院・医師	⑥午後13:30~14:30【子どもの強迫性障害について】東京都立梅ヶ丘病院・医師 ⑦午後14:30~15:00【梅ヶ丘病院での児童思春期のリハビリテーション活動】東京都立梅ヶ丘病院・リハビリ科主任	
	8月18日 水	PTA事業関係		
	8月19日 木	～PTAシンポジウム～「特別支援教育時代のPTAの在り方を考える」am10~pm3		
	8月20日 金	PTAサマースクール		
	8月21日 土			
	8月22日 日			
	8月23日 月	本校教職員対象研修		
出勤日	8月24日 火			
	8月25日 水			
	8月26日 木	自閉症教育: 東京学芸大学・教授(am10~12)	新聞記者から見た教育: 東京新聞社記者(am10~11:30)	
	8月27日 金	ビルクリーニングの実際と実技: 東京ビルメンテナンス協会(am10~12)	ビルクリーニングの実際と実技: 東京ビルメンテナンス協会(Pm1-4)	
	8月28日 土			
	8月29日 日			
	8月30日 月			

※中野養護学校資料 特別支援教育 センターの機能発揮 研修その他 関係 より (一部改変)

IV おわりに

今後盲・聾・養護学校は、専門性・指導力の向上に加えて、地域の特別支援教育のセンター的役割を担う特別支援学校（仮称）への変革を求められている。センター的機能の具体的内容として次の5点が挙げられている。

- ① 小・中学校等の教員への支援機能
- ② 特別支援教育等に関する相談・情報提供機能
- ③ 障害のある幼児児童生徒への指導機能
- ④ 特別支援教育に関わる様々な機関との連絡・調整機能
- ⑤ 小・中学校等の教職員に対する研修協力機能

これらは、どれをとっても校内の研究・研修体制と大きくかかわるものばかりである。今回取り組みを紹介させていただいた2つの学校は、センター的機能の充実に向けた学校づくりに取り組んでおり、共通する点が多い、まず第一に校内の研究・研修についての捉え方である。研究・研修については学校の経営計画の中に位置づけがあり、目指す学校像とその経営方針に沿って取り組まれているという点である。したがって、研究の内容やテーマ設定については、研究・研修を担当する部署に委ねられるのではなく、あらかじめ設定されている方針・目標に向けて、研究・研修を担当する部署がその方法を具体化するということである。次に関係機関との連携である。学校経営計画は地域の関係機関、教育の専門家、保護者からの助言、提言をうけながら検討され、年度末には評価を受けるシステムが機能している。また、研究・研修の取組においても、その内容に応じて関係する専門的分野の人材を活用するといったまさに地域、関係機関とのネットワークによる協働によって、開かれた特色ある学校づくり、専門性の向上を目指している。特に研究・研修では、従来からの講演会等で講話をきくという形ではなく、スーパーバイザーとして継続的に研究の推進や実践面においても参画と協力を得ている。この二つの視点は、今後同じ方向を目指す本県の盲・聾・養護学校にも大いに参考になるであろう。